

# 简明日本近现代文学史教程

徐明真 著  
宿久高 审校



北京语言大学出版社  
BEIJING LANGUAGE AND CULTURE  
UNIVERSITY PRESS

H369.4/124

2007

# 简明日本近现代 文学史教程

徐明真 著  
宿久高 审校



北京语言大学出版社  
BEIJING LANGUAGE AND CULTURE  
UNIVERSITY PRESS

## (京)新登字 157 号

### 图书在版编目 (CIP) 数据

简明日本近现代文学史教程 / 徐明真著.

—北京: 北京语言大学出版社, 2007.5

ISBN 978-7-5619-1832-6

I. 简…

II. 徐…

III. ①文学史—日本—近代—高等学校—教材

②文学史—日本—现代—高等学校—教材

IV. I313.09

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2007) 第 060819 号

---

书 名: 简明日本近现代文学史教程

责任印制: 包 朔

---

出版发行: **北京语言大学出版社**

社 址: 北京市海淀区学院路 15 号 邮政编码 100083

网 址: [www.blcup.com](http://www.blcup.com)

电 话: 发行部 82303648 /3591 /3651

编辑部 82303393

读者服务部 82303653 /3908

印 刷: 北京外文印刷厂

经 销: 全国新华书店

---

版 次: 2007 年 5 月第 1 版 2007 年 5 月第 1 次印刷

开 本: 710 毫米×1000 毫米 1/16 印张: 13.75

字 数: 185 千字 印数: 1—5000 册

书 号: ISBN 978-7-5619-1832-6 /H·07051

定 价: 28.00 元

---

凡有印装质量问题本社负责调换, 电话: 82303590

## 序

徐明真君的《简明日本近现代文学史教程》摆在案头很久，也读了很久。真有爱不释手之感。

近年来，在我国日本文学研究界，关于日本文学的研究成果层出不穷，包括作品论、作家论、文学史、文学思潮、文学理论、文学流派、影响研究等诸多方面。无论从哪个角度看，论述的深度和水平都有了质的飞跃，越来越接近日本文学的本质。这是日本文学界同仁共同努力的结果。尤其值得一提的是，一批年轻学者以活跃的思维、敏锐的感觉和创新学术的激情，挑战新的学术研究领域，并取得了可喜的成就。

徐明真就是这些年轻学者中的一员。她的《简明日本近现代文学史教程》，融实用性和学术性为一体，清新且知识丰富，从明治前期的文学开始，一直述及昭和后期以及人们正在经历的平成时期的文学；明快且条理清晰，每一章都首先介绍了概要和时代背景，使读者能够在特定的时代背景之下去解读、去理解产生于不同时代的日本文学的特质，以及与社会的关系；简明且重点突出，对不同时代的代表性文学流派、文学思潮以及代表性作家和作品的阐述，不惜笔墨，以点带面，可期事半功倍之效。作者还把日本文学和日本社会发展的历史浑然融为一体，巧妙地勾勒出日本近现代文学发生、发展的清晰脉络，从而揭示出日本文学发生和发展的必然规律，富有学术性，多有独到创获。

徐明真硕士、博士均从我研习日本文学，作为吉林大学日本语言文学系的一名年轻教师和富有发展潜力的日本文学研究者，专心学问，孜孜追求，执著向上，取得了不斐的成就。这部

《简明日本近现代文学史教程》的问世，只是她日本文学研究的阶段性成果。相信在这一基础上，更多、更好的研究成果将不断地呈现在大家面前。作为导师，我和大家一起，热切地期待着。

是为序。

中国日语教学研究会会长

吉林大学外国语学院院长

博士生导师

宿久高

2007年3月5日 于长春

# 致使用者

## 一、本书的目的

“日本近现代文学史”作为一门系统介绍日本近现代文艺思潮、文学流派和名家名著的课程，是很多高校日语语言文学专业的专业必修课；同时也是一门深受学生喜爱的课程，许多学生由此增加了对日本、日本民族和日本文化的兴趣，因而更增强了学习其他专业课的动力。本书正是为日本近现代文学史课程（也包括其他课程名称不同但课程内容近似的日本近现代文学课程）量身定制的一本教材。笔者作为一名工作在教学第一线的日文专业教师，一直有一个夙愿，就是结合自己多年的教学经验和心得，撰写一本在教学内容设置、教材体例、知识要点分布、难易程度等方面都恰到好处地适合“日本近现代文学史”课程教学需要的《简明日本近现代文学史教程》。这既是本书的写作初衷，也是本书的目的。

## 二、本书的内容构成及特色

本书以日本近现代文学为叙述对象。在本书中，近代指1868年（明治元年）至1926年（大正15年/昭和元年）的近60年，现代指1927年（昭和2年）至今的近80年。

本书在撰写过程中兼顾了以下两点：一方面尽可能对日本近现代文学进行系统的介绍和综合的论述；另一方面充分为目标使用者着想，力求保持简明扼要的风格，在不影响内容的前提下尽量压缩篇幅，同时在行文上着意斟酌，以使日语语言表达难度适合使用者的日语能力。

本书具有以下主要特色：

1. 本书书写语言为日语，省却翻译步骤，更直截地向使

用者介绍日本近现代文学史知识。

2. 本书采纳了比较整齐的历史分期方法,便于使用者对日本近现代文学史有一个明确、迅速的整体把握。本书在纪年上采用公历纪元与年号并用的方式,便于学生在近现代史的背景下感受文学的发展进程。

3. 本书一方面内容充实,对日本近代文学和现代文学进行系统的介绍,便于总体把握;另一方面重点突出,内容经过仔细筛选,便于使用者在有限的时间内掌握更多知识要领。每章前设“概要”和“时代背景”栏,每节前亦有概述性文字,便于使用者识别重点。

4. 本书关注西方近代文艺思潮对日本文学的影响,对此进行了简明的梳理,帮助使用者拓展思路,不仅掌握文学史常识,而且知道其所以然。

5. 本书在介绍创作时间跨度较大的重点作家时,对内容做了适当调整,以使知识要点分布简约化,便于使用者理解、掌握。

6. 最后,也是最具特色的一点是,本书附有包含本书中所涉及的所有作家、作品、文学事项的“日本近现代文学史简明年表”,和特别适合中国学生使用的、按照汉语拼音顺序排列的“读音索引”(包括作家·历史人物名、作品人物名、作品·报章杂志名三部分)。这使本书不仅可以作为教科书,同时也可以作为便利的工具书来使用。

### 三、本书的推荐使用方法

本书的目标使用者为高等学校日语语言文学专业本科高年级学生,及日本文学与日本文化方向硕士研究生。本书既可作为本科高年级“日本近现代文学史”课程的教科书使用,也可作为日语语言文学专业硕士研究生入学考试的复习参考资料使用。

本书作为教科书使用时，预设总学时数为 64 至 72 学时。理想的学时分布为两个学期，周学时为 2 学时，每学期 32 至 36 学时。这样可以使学生对所学知识有充分的时间进行理解、消化；同时，可以使对文学专业兴趣浓厚的学生有充分的时间进行与文学史课程基本同步的课后阅读，以便为相关课程的学习和日后的深造打下更为深厚的基础。

本书在构成上，简言之，是以文学史描述为主线，辅以重要作品的选介。因此本书的内容是有一定弹性的，授课教师完全可以根据各自院系对文学课程教学安排的总体规划和学时数的安排，适当增删作品选介部分的内容。

好的教材多是在与使用者互动的过程中逐渐完善起来的。笔者真诚希望得到更多来自同行和学生的反馈意见和建议，敬请不吝赐教。

徐明真  
2007 年 2 月



# 目 次

|     |                     |    |
|-----|---------------------|----|
| 第一章 | 時代区分と文学概観           | 1  |
| 第二章 | 第一期・明治前期の文学         | 4  |
|     | 概要・時代背景             | 4  |
|     | 第一節 啓蒙学者            | 5  |
|     | 第二節 仮名垣魯文と戯作文学      | 6  |
|     | 第三節 翻訳文学と政治小説       | 7  |
| 第三章 | 第二期・明治中期の文学         | 9  |
|     | 概要・時代背景             | 9  |
|     | 第一節 坪内逍遙と二葉亭四迷      | 10 |
|     | 第二節 初期の森鷗外          | 13 |
|     | 第三節 尾崎紅葉と幸田露伴       | 16 |
|     | 第四節 北村透谷と『文学界』      | 21 |
|     | 第五節 樋口一葉ほか          | 23 |
|     | 第六節 浪漫主義文学・小説編      | 25 |
|     | 第七節 浪漫主義文学・詩歌編      | 31 |
|     | 第八節 社会小説            | 38 |
| 第四章 | 第三期上編・明治後期の文学       | 42 |
|     | 概要・時代背景             | 42 |
|     | 第一節 自然主義文学運動        | 43 |
|     | 第二節 自然主義文学創作        | 47 |
|     | 第三節 近代文学の双壁（一）・夏目漱石 | 56 |
|     | 第四節 近代文学の双壁（二）・森鷗外  | 63 |
|     | 第五節 耽美派             | 68 |
| 第五章 | 第三期下編・大正期の文学        | 76 |
|     | 概要・時代背景             | 76 |

|             |                                    |     |
|-------------|------------------------------------|-----|
|             | 第一節 白樺派 .....                      | 77  |
|             | 第二節 新思潮派 .....                     | 84  |
|             | 第三節 私小説と新早稲田派 .....                | 94  |
|             | 第四節 近代詩の黄金時代 .....                 | 98  |
| <b>第六章</b>  | <b>第四期・昭和前期の文学</b> .....           | 105 |
|             | 概要・時代背景 .....                      | 105 |
|             | 第一節 プロレタリア文学 .....                 | 107 |
|             | 第二節 新感覚派 .....                     | 113 |
|             | 第三節 芸術派のいろいろ .....                 | 122 |
|             | 第四節 現代詩の成立 .....                   | 127 |
| <b>第七章</b>  | <b>第五期・昭和中期の文学</b> .....           | 133 |
|             | 概要・時代背景 .....                      | 133 |
|             | 第一節 「昭和十年代作家」の活躍 .....             | 135 |
|             | 第二節 戦後派 .....                      | 140 |
|             | 第三節 第三の新人 .....                    | 148 |
|             | 第四節 「昭和三十年代作家」の登場 .....            | 153 |
|             | 第五節 大衆文学の繁盛 .....                  | 157 |
| <b>第八章</b>  | <b>第六期・昭和後期及び平成期文学概説</b> .....     | 161 |
| <b>付録一</b>  | <b>日本近現代文学略年表（1868—1989）</b> ..... | 167 |
| <b>付録二</b>  | <b>読み方索引（中国語発音ローマ字順）</b> .....     | 178 |
|             | 一、作家名・人名 .....                     | 178 |
|             | 二、作中人物名 .....                      | 188 |
|             | 三、作品名・紙誌名 .....                    | 192 |
| <b>参考文献</b> | .....                              | 208 |



## 第一章

### 時代区分と文学概観

本書は、日本近現代文学を考察対象としているが、近現代とは、近代と現代とを合わせた言い方であり、日本歴史の時代区分に準じて言えば、ふつう1868年（明治元年）から1926年（大正15年／昭和元年）までの60年弱を近代とし、1927年（昭和2年）から現在に至る80年弱を現代とする。近現代文学は即ちこの百数十年間の日本の文学を指す。

また、吉田精一氏は、日本の近現代文学の時代区分について、「大体において、二十年前後をもって一つのゼネレーションと見、さらに十年ごとに一つの曲がり角にくると考えたほうが、より適当であります。」<sup>①</sup>と述べた。この見方は簡単明瞭で、しかも日本近現代文学の流れの特質に的中している説として広く認められている。本書も、吉田氏の区分方法に準じて、日本近現代文学を下記の通りに区分し、その流れを時代ごとに考察していきたい。

第一期は、1868年から1886年までの20年弱で、年号で言えば明治前期（明治元—19年、以下「明」と略す）となる。その間、前半の10年間は、明治という新しい時代に入ったが、新しい文学と言えるものはまだ見られず、前代（近世）

① 吉田精一「現代日本文学史」P6，筑摩書房，1993。

文学の継承期であった。1878（明11）年ごろから、翻訳文学が盛んになってきて、ようやく新しい文学の曙の光が差し始める。

第二期は、1887年から1905年までの20年弱で、明治中期（明20—38年）となる。その間、1887年前後から、数多くの作家がほぼ同時に登場し、近代文学の暁を迎える。それが1894—1895（明27—28）年の中日甲午戦争（日本では通称日清戦争）によって一つの曲がり角にきて、文学における思想的な面への要求が強く求められるようになった。また、個人の自覚とか、自我の要求とか、個性の解放などということが強く求められるようになり、浪漫主義文学がその全盛期を迎えた。

第三期は、1906年から1925年までのちょうど20年間で、明治後期大正期（明39—大正14年、以下「大」と略す）となる。第三期の文学は自然主義文学運動で幕を開かれるが、やはり1914（大3）年の第一次世界大戦によって一つの曲がり角にくる。大正デモクラシー運動の影響の下で、社会思潮の上で人文主義、民主主義思想の高揚とともに、文芸思潮の上でも、自然主義と非自然主義文学運動との分かれ目がそこにできる。夏目漱石・森鷗外の文学観、美意識、倫理観を継いだ人々は自然主義者と交替して文壇の主流を占めるようになる。

第四期は、1926年から1945年までの20年強で、昭和前期（昭和元—20年、以下「昭」と略す）となる。この時期の前半は、プロレタリア文学と、新感覚派をはじめとする芸術派との対峙によって活気溢れる文壇を成してきたが、軍国主義の勢いが一段と強まり、1934（昭9）年にプロレタリア文化連盟が解散を余儀なくさせられ、プロレタリア文学に対する弾圧がますます強くなってしまい、そこで一つの区切りを迎

える。戦時中、「昭和十年代作家」と呼ばれた人々は、いわゆる「国防文学」跳梁の厳しい時勢の中で、生存の隙間を探って価値ある作品を残した。

第五期は、1946年から1960年代末頃までの20年強で、昭和中期（昭21—43年）となる。敗戦後の荒廃、混乱、欠乏から、次第に経済が復興し、国民生活が安定し始めた時期である。文学においては、戦争体験に基づいて近代日本の歩んできた道を反省するとともに真の近代性を求めようとする戦後派の文学から出発したが、「昭和三十年代作家」（戦後世代作家）の登場によって一つの曲がり角にきて、文学の社会化、商業化の時代を迎える。

第六期は、1970年代に入ってから現在に至るまでの間で、昭和後期平成期（昭44年—現在）となる。高度成長期が終わって、オイルショックやバブル崩壊など経済の低迷期を挟んでいるが、全般に物質的に恵まれ、日本は豊かな国となった。国際化、グローバル化が進むにつれ、人々は多岐にわたる価値観を持つようになる。かつての、主たる文学思潮や流派によって文壇が率いられるような現象は再び見られず、作家たちは個別に活躍し、現代生活に各自独特な解釈を加えるようになり、文壇に多彩な活況を与え続けてきた。



## 第二章

### 第一期・明治前期の文学

#### 概要

本章は、近世文学の継承としての戯作文学、福沢諭吉ら文明開化期の啓蒙者の活躍、新しい時代の新しい文学としての翻訳文学と政治小説などを中心内容とする。

#### 時代背景

維新期の日本は、欧米諸国のまねをして、政治制度をはじめ社会生活の各領域において改革を行う時代であった。このころ、日本の古い伝統を否定し、全般に西洋のまねをすることが、すなわち文明開化であり、進歩であると信じて、無批判に西洋文明を模倣する傾向が見られた。時代の先端に立つ有識者も日本国民に西洋文明の啓蒙をすることに尽力した。一方、思想の面では、封建的な考え方が依然として根強く残っており、人間の個性を認め自由を尊ぶ考え方はまだ発達していなかった。

文学史のほうから言えば、文学が人間生活あるいは社会生活において、どういう意味を持つべきか、どういう役割を果たすべきかということを、次第に真剣に考えられるようになって

ってきた時期でもあるが、新しい時代の新しい文学と言えるような創作が現れてくるにはまだ早かった。

## 第一節 啓蒙学者

文明開化期は、民間啓蒙思想家や百科全書的な学者が大いに活躍する時代であった。彼らは西洋の新しい思想、新しい科学技術をもって、日本国民の啓蒙をすることを自らの使命として背負った。福沢諭吉や中村正直がその代表者であり、彼らの唱えたいわゆる実学が立身出世を目指す若者たちに大きな影響を与えた。

### 1. 福沢諭吉 (1835—1901/天保 5—明治 34)

福沢諭吉は『西洋事情』(1866—1870/慶応 2—明治 3)を書いて、独力で、西洋の事情、地理、歴史、文化、制度、物理、化学、演説法、あるいは射撃法、簿記法など、西洋の物質文明、合理主義文明のほぼあらゆる面についての紹介を行った。また、『学問のすすめ』(1872—1876/明 5—9)を書いて、人間平等宣言と「一身独立・一国独立」の主張で、当時の青年たちを励ました。

### 2. 中村正直 (1832—1891/天保 3—明治 24)

福沢諭吉のやや物質主義あるいは実用主義に偏る考え方とは対照的に、中村正直の『西国立志編』(1871/明 4)は、欧米の偉人や学者の立志逸話を集めて、精神や道徳の面で市民社会にふさわしい個人道徳、個人主義精神を唱えた。厳密には創作ではなく、イギリス人スマイルズの『セルフ・ヘルプ』を翻訳したもののだが、「明治の聖書」と言われたほどの名著である。

## 第二節 仮名垣魯文と戯作文学

明治に入って最初の10年間は、新しい文学と言えるものが見られない、前代（近世）文学の継承時代であった。多くは文学価値の低い儒学書、漢詩文、歴史書などであり、滑稽本などの戯作は暇つぶしのためのものと見なされていた。この時期の文学史的価値のあるものとして、仮名垣魯文の滑稽本や成島柳北の『柳橋新誌』（1874/明7）など、維新の世相を風刺し反映する作品が挙げられる。

### 仮名垣魯文

仮名垣魯文（1829—1894/文政12—明治27）は、本名野崎文蔵、明治前期の戯作者・新聞記者である。江戸（東京）生まれで、開化期の東京の世相をユーモアたっぷりの筆致で描くのが得意であった。その代表作品に、『西洋道中膝栗毛』や『安愚楽鍋』などが挙げられる。

#### 1. 『西洋道中膝栗毛』（1870/明3）

滑稽本。「栗毛」は馬の毛色の名、栗色をした毛並み（の馬）で、「膝栗毛」は徒歩旅行をしゃれで言った言葉である。江戸時代の戯作名作、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』のもじり①作で、その主人公の弥次と喜多の孫を主人公に立て、二人をロンドンにまで旅立たせ、その旅行記とでも言えるも

---

① 既に慣用的な表現を応用して、諷刺や笑いを含める書き替えをする創作方法である。



のである。作者は実際イギリスに行ったことがないため、内容にはおかしなところも見られるが、明治初期の文壇を飾る戯作として、文学史的な価値を持っている。

## 2. 『安愚楽鍋』(1871—1872/明4—5)

滑稽本。江戸時代の戯作名作、式亭三馬の『浮世風呂』『浮世床』などに倣い、当時流行の牛鍋（すき焼き）屋に集まる人々の浮世談義を記したものである。空想で書いた『西洋道中膝栗毛』に対して、皮相的ながらも、文明開化期の風俗に正面から取り組んで、世相反映・風刺を意識的に行った作品としてそれなりに高い価値を持っている。

## 第三節 翻訳文学と政治小説

戯作文学は、結局明治初期の世相風俗を表面的に描くことに止まり、新しい時代の精神を得られなかった。文学において啓蒙思潮を代表し、新旧時代の橋渡しとなって、本当の意味での近代文学の誕生を促したのは、翻訳文学と政治小説であった。

### （翻訳文学）

1878（明11）年頃から、ヨーロッパ文学の翻訳が出版界の新しい風潮となって、多くのヨーロッパ文学の名作が日本に紹介されてきた。読者から大きな反響を呼んだものを挙げると、イギリスのものではシェークスピア（劇作）、デフォー（『ロビンソン・クルーソー』）、スコット（歴史小説）、フランスのものではベルヌ（『八十日間世界一周』ほか）、デュマ（『三銃士』ほか）、ユゴー（『レ・ミゼラブル』）、漢译《悲惨